

< 口腔の役割 >

石垣の風景

桐生が岡公園下の山手通り。柄杓山城（ひしゃくやまじょう）に通ずるこの歩道は玉石積みの石垣と戦時中に整備されたコンクリートの欄干が特徴であり、桐生の歴史的な景観のひとつとして知られています。地震や風雨に耐えながら威風堂々と連なる見事な石垣。通勤や通学、普段の生活でこの通りを往来する人の他にも観光で訪れた人達の間を楽しませてくれます。

この美しい道路は人工構造物である石垣が周辺景観に見事に調和していますが、そもそも石垣が築かれる目的は土地の補強の他、境界線、建物の基礎、またはあるときは城壁のように防御施設としての役目があります。何十年、何百年も崩れずに現代に残る石垣はその時代の土地柄、石材事情にもよりますが、どこの石垣もその時代の石工（いしく）の技術の結晶です。

さて防御施設といえば、ヒトの口腔粘膜もそれに例えることができます。口腔粘膜は口の中の全体を覆い、熱さや辛味、酸味などの刺激の他、歯でうっかり頬や舌を咬んでしまったり、細菌や炎症、腫瘍に対しても体の内部を守るバリアーの役目をしていいます。この口腔粘膜は実は「石垣」のように、石を積み重ねたような構造をしています。堅固な石垣を造るにはまず基礎を固めることが重要。口腔粘膜の最下段は基底（きてい）細胞を配列させる基底膜。これが口腔粘膜の基礎にあたります。基底細胞はつねに新しい石を上方に向けて産生し、産生された石はお互いの連結を強めてこれが石垣の主体となります。さらに石の産生が続けられ、やがて石が寿命を迎えると最後は角質（垢：あか）となり、外に捨てられます。石の寿命は約2週間。口腔粘膜は絶えず過酷な状況にあるため、2週間程度で入れ替わります。この機能性と合理性を兼ね備えた構造物は人体がもつ石工の技と言えるでしょう。

山手通りの歩道の石垣は、かつて桐生をロケ地とした映画にも登場します。成瀬巳喜男監督「妻の心」（1956年）は桐生の老舗の薬屋を舞台にした映画です。俳優の三船敏郎と高峰秀子の二人がこの石垣の歩道を散策し、桐生が岡公園に上っていくシーンが印象的です。60年以上前の映画ですが、当時の風景とほとんどかわっていません。桐生が岡公園の他、本町通り、本町通りと山手通りを結ぶ「矢野園」向かいの恵比寿通りなど、昭和31年当時、桐生の織物業の戦後の隆盛をむかえる頃の街並みが記録されています。

映画の話はさておき、桐生にはまだまだ歴史的な建造物や風景がたくさんあります。遠方への旅行などをためらってしまうこの時期だからこそ、地元桐生の懐かしい歴史の街並みや風景を探訪できる良い機会なのではないでしょうか。

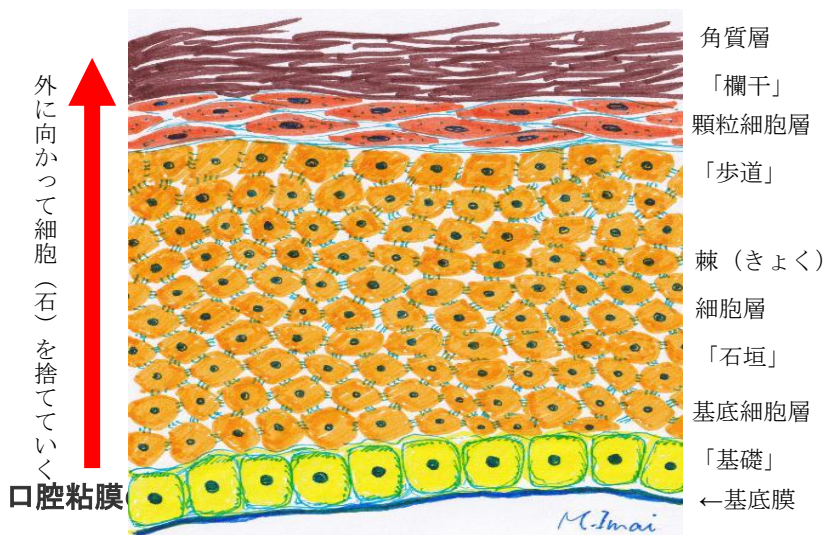


山手通りと歩道わきの水路

「妻の心」の撮影中、鉄柵がなかった当時、三船敏郎が水路に落ちたと言われています



玉石積みの石垣と特徴ある欄干が続きます



【歯科口腔外科診療部長 今井 正之】

